

分析化学研究の必要性

寺 部 茂



明けましておめでとうございます。本年が皆様にとりましてよい年となることを祈念しております。

さて、会員の皆様にはご存知のように、平成16年度から先端計測分析技術・機器開発関係の大型プロジェクトがいくつか始まっております。前会長の二瓶好正先生を委員長とする文部科学省「先端計測分析技術・機器開発に関する検討会」の審議に基づいて開始されたプロジェクトであります。具体的には、科学技術振興機構(JST, <http://www.jst.go.jp/jigyoku.htm>)による「先端計測分析技術・機器開発事業」、戦略的創造研究推進事業による戦略目標「新たな手法の開発等を通じた先端的な計測・分析機器の実現に向けた基盤技術の創出」に向けたチーム型研究(CRESTタイプ)2研究領域および個人型研究(さきがけタイプ)1研究領域であります。先端計測分析技術・機器開発事業には機器開発プログラムと要素技術開発プログラムがあり、前者は領域特定型5と領域非特定型1の計6領域からなり、企業との共同開発が求められています。平成16年度は、前者で計232件の応募があり18件が、後者は292件の応募があり11件が採択されました。CRESTタイプでは2研究領域合わせて276件の応募があり計10件が採択され、さきがけタイプでは502件の応募があり24件が採択されました。これら多数の応募件数を見ますと、分析化学に強い関心を持った研究者が非常に多いと判断できます。

大部分の本会会員にとっては、これまでに経験のない多数の関連プロジェクトの募集があり、応募に忙しく対応されたことと思います。これらのプロジェクトへの応募者の詳細は存じませんが、かなり多数の会員が応募されたと想像しております。採択課題を見ますと、残念ながら本会会員が研究代表者となっている件数は、さきがけタイプを除いてはわずかです。とくに「先端計測分析技術・機器開発事業」は計測分析機器の開発が目的のプロジェクトでしたので、日頃の研究成果に基づいて機器開発を計画されていた会員には、またとないよい機会であったと思います。しかし、公募要領発表から締め切りまで時間的余裕が少なく、十分な計画が練れなかったことも、対応を難しくしたのではないかと思います。聞くところでは、平成17年度も公募があるとのことですので、次回にはぜひ優れた提案を準備していただき、本会会員の多数の応募が採択されることを期待しております。本年度公募のあった大型プロジェクトはすべてチーム型研究であり、分析化学研究者のみでは応募することが難しく、また訴える力も弱いと思われまふ。これを機会に、異分野研究者との共同研究に積極的に参加していただきたいと思ひます。これは、企業との共同研究にも言えることと思ひます。今回公募のありました研究の戦略目標は、新現象の発見や解明のための先端計測分析技術の開発であることから明らかなように、分析化学研究で完結するのではなく、分析化学研究があらゆる分野の研究にとっても必須の要素となることを示していただきたいと強く希望します。同時に、分析化学の学問的存在感を他分野の研究者に認識していただけるよう努力していただきたいをお願いします。

[Shigeru TERABE, 兵庫県立大学大学院物質理学研究科, 日本分析化学会会長]